韻律指導の実践と学習者の変化

The Practice of Prosody Teaching and Transition of Learners

福井貴代美

FUKUI Kiyomi

早稲田大学日本語センター：〒169-8050　東京都新宿区西早稲田 1-7-14

Center For Japanese Language Waseda University:kiyomi-f74@vesta.ocn.ne.jp

Abstract：The necessity of systematic prosody teaching has been expressed. And, based on this educational materials have been developed. However, reported cases of actual prosody teaching are still few. Here, through an attempt at experimental prosody teaching emphasizing the 3 points of introduction of prosodic visualization and the phonological rule, and promotion of self-monitoring, along with problems and effects of the instructions being verified, the transition of the learner's pronunciation and listening abilities are observed. The results showed transition (of learners) with demonstrable progression of consciousness-raising, though there are individual differences. Further, a relationship between pronunciation ability and listening ability, and self-monitoring was also suggested.

キーワード：韻律の視覚化，アクセント規則の導入，自己モニター，意識化，聞き取り能力，発音能力

1. はじめに

体系的な韻律指導の必要性が言われ、それに即した教材も開発されてきている。しかし、まだそれらを利用した実際の韻律指導の報告例は多くはない。よってここでは、2004年3月に実施した実験的韻律指導の試みから、学習者の発音・聞き取り力の変化とともに、学習者の発音能力を支える要因に関して考察を行った、その結果を報告する。

2. 問題と目的

指導にあたっては、韻律の視覚化、規則の導入、自己モニター促進の３点にポイントをおいた。串田他(1995)や、松崎(1995)などでその指導効果が報告されているプロソディーグラフを使用し、磯村(1996)で、有効と述べられている音韻規則の導入を重視する。さらに小河原(1997a,b,1998)で、学習者の発音能力との関係性が高いとされている自己モニター型学習も取り入れ、指導の効果、問題点などを検証するとともに、学習者の聞き取り、発音力の変化などを確かめ、発音能力に関わる要因についても考えることを目的とした。

3. 研究方法

3. 1　指導

指導対象の協力者は、実験的な短期集中指導であるため、日本語の発音に関して、ある程度の知識があることが望ましいであろうとの考えから、早稲田大学別科において、発音クラスの受講経験がある７名の初級後半から中級前半レベルの学習者とした。なお、様々な背景をもつ学習者が集まる教室での指導を考え、母語の限定はしていない。

指導は２～３名ずつのグループにわけ、１日２時間程度、４日間行った。指導の範囲は複合名詞と句のアクセントの問題を中心とした。毎回はじめに、文のヤマの数や、アクセント・拍の問題に関する聞き取り練習を行った。指導のポイントの１つである音韻規則の導入には、田中ほか (1999) をもとに資料を作成した。次に、韻律の視覚化には、河野他 (2004) のプロソディーグラフを使用した。最後に自己モニターの促進には、自己評価シートの記入という３回の課題を与えた。課題は、毎回指定された練習文を予め与えられたモデルテープを聞きながら練習し、その後で、自分の音声を録音し、その録音テープとモデルテープを聞き比べて、違いを具体的に記述するというものである。

3. 2　テスト

指導による学習者の変化を確かめるため、指導前後に聞き取りと発音の２つのテストを実施した。聞き取りテストは、指導内容に合わせ、複合名詞と句のアクセントを聞きとるものである。問題は複合語と句を合わせて全部で50問とした。指導前後で、同条件で作られた異なる問題を使用した。発音テストは、指導範囲から、限定関係にある句や、複合名詞を含む文のヤマを意識した発音について確かめるもので、問題の構成は、短文が９、文章が１(約120字) である。なお、テストは指導前後で同様のものを使用したが、指導時の練習では、テスト文については扱っていない。なお、テストは、１名ずつ録音機(SONY TCM－5000EV) を用いて、テープに録音した。

3．3 テストの評価

聞き取りテストについては、全体で50問であるので、2倍してパーセンテージ（%）で、正答率を出した。

発音テストについては、指導対象者の指導前後の音声を、問題文ごとにランダムに編集したテープを作成し、6名の日本語教師に評価を依頼した。評価基準については、「日本語としての韻律の自然さ」という観点から5段階の評価をしてもらい、あわせて具体的なコメントも記述してもらう方法をとった。6名の評価者から戻ってきた評価シートの数値を集計し、5段階評価×6人＝各30点満点で、10個のテスト文ごとに得点化し、10問の合計300点満点で確かめた。

4．結果と考察

4．1 指導のポイントから

まず、教材として使用したプロソディーグラフについては、母語により、その受け入れやすさに差が見られた。中国語系の高低アクセントを持つ言語の学習者には、理解もはやく、指導の効果は上がるが、強弱アクセントの言語を母語とする学習者にとっては、拍感覚が十分に養われていない段階では、理解に時間を要し、指導の効果は上がりにくいことがわかった。よって、さまざまな母語背景を持つ学習者が集まったクラスでの使用においては、扱いに工夫が必要であると言える。次に、複合語や句のアクセント規則の導入により、アクセントに対する意識化が促されるようになることが示された。そして、その意識化が発音や聞き取りに有効に働くことがわかった。とくに体系的に覚えることが可能な複合語に関してはその効果が大きいことが確かめられた。最後に自己モニター型の課題からは、自らの発音を客観的に振り返る機会を持つことで、発音に対する意識化を促す効果が見られた。同時に、自分の発音の問題点に気づき、的確に指摘できている者ほど、発音テストにおける評価が高いという結果が示された。

4．2 テストの結果から

発音・聞き取りテストの協力者個々の細かい数値は、紙面の都合で省略するが、どの学習者も、指導後には上昇が見られた。聞き取りテストでは、上昇幅の最も少なかった者で10%、最も大きく伸びた者は50%の伸びを示し、平均して30%近い上昇が見られた。伸びの大きかった者は、導入されたアクセント規則などをしっかりと復習し、身に着けようとしたことが結果に表れたようだ。発音テストでも、300点満点で、＋13点～＋71点の伸びが見られ、平均して＋37.3点という結果であった。特に伸びの大きかった者は、発音に対する意識が非常に高く、高低アクセントに敏感で、教材にも大変興味を示していた学習者であった。また、評価者のコメントで、指導前の音声に対して見られた語や句としてのまとまりのなさの指摘が、指導後のものには、あまり見られなくなっていた。以上のように、個人差はあるものの、指導により、確実に意識化が進み、学習者の発音や聞き取りに変化が表れることがわかった。さらに、聞き取りと発音のテストにおける上位群と下位群のメンバーは、一致しており、聞き取りテストで成績の良かった者は、発音テストにおける評価も高いという結果であった。

4．3 学習者の発音能力

指導、テストを通して、学習者の発音能力を支える要因として、聞き取り力との関係、さらに自己モニター力との関係性も見えてきた。アクセントを捉える基準を持っている学習者の方が、それを意識した発音をすることで、自らの発音を改善しやすい傾向があると言ってよいだろう。他にも、学習者の様子やアンケート調査の結果から、発音に対する意識の高さなども、発音能力を支える重要な要因の1つとなっていることが観察された。

引用・参考文献

磯村一弘(1996)「アクセント型の意識化が外国人日本語学習者の韻律に与える影響」『日本語国際センター紀要』6号pp1-17

小河原義朗(1997ａ)「発音矯正場面における学習者の発音と聴き取りの関係について」『日本語教育』92号 pp83-94

_____(1997ｂ)「日本語発音学習における学習者の自己評価」『言語科学論集』第1号pp27-38 東北大学文学部言語科学専攻

_____(1998)「日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討」『言語科学論集』第2号pp1－12 東北大学文学部言語科学専攻

河野俊之・串田真知子・築地伸美・松崎寛共著(2004)『1日10分の発音練習』くろしお出版

串田真知子・城生伯太郎・築地伸美・松崎寛・劉銘傑(1995)「自然な日本語音声への効果的なアプローチ：プロソディーグラフー中国人学習者のための音声教育教材の開発ー」『日本語教育』86号pp39-51

田中真一・窪園晴夫(1999)『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版

松崎寛(1995)「日本語音声教育におけるプロソディーの表示法とその学習効果」『東北大学文学部日本語学科論集』第5号pp85-96